

前穂高岳屏風岩雲稜ルート～北穂高岳滝谷ドーム中央稜ルート

— 31 年前の自分に会いに —

OWCC 中川和道 20130831

通称パチンコルートはアルパインクライミングを志す者にとって中級クライマーに成長するうえで避けて通れない登竜門のような存在だ[文献 1]。中川は 31 年前に 4 度目の挑戦でこれを登り[文献 2]、「君もやっと駆け出したね」と言ってもらい嬉しかったことを覚えている。大阪労山の若いクライマー達にもぜひ登ってもらいたいと願い、記録を書いてみることにした。もし参考になれば幸いである。

63 才 7 か月の私は定年退職を 17 か月のちに控え、今どれだけの登山が自分にできるのかを知りたいと思った。そこで 1982 年 9 月 11-15 日に登った通称パチンコルートすなわち穂高屏風岩～奥又白～滝谷を連ねた継続登攀を再びやってみることにした。いわば、31 年前の自分に会ってみたいと思ったのである。当時は星稜登高会の中川、中島、高橋の 3 人で挑戦。入山日とその次の日を台風にやられて停滞し、1 日目 9 月 13 日に横尾を発ち屏風岩雲稜ルートを 4 時間で登り 5.5 時間で奥又白の池に達して幕営し、2 日目 14 日にⅣ峰東南壁東京歯科大ルートを 3 時間で登った後そのまま 5.5 時間で滝谷まで歩き、ドーム北壁右ルートを 1.3 時間でその日のうちに登攀し 15 日に下山したのであった。

今回は OWCC 松田明博さんと中川和道とでパーティーを組み、登攀ルートは屏風岩東壁ルンゼルート～前穂高北尾根Ⅳ峰正面北条新村ルート～北穂高滝谷ドーム中央稜ルートを予定した。2013 年 5 月連休が明けてアイゼンを脱いだ直後から開始したトレーニングでは、松田さんと 10 回にわたって炎天下の不動岩を登りこみ、油こぶし登山道でボッカに励んだ。松田さんのおかげでこの山行に至ったのだ。

■2013/8/13 晴 入山から T4 へ

- 0805 上高地発
- 1130 横尾発
- 1155 渡渉開始
- 1250 1 ルンゼ押出登山開始
- 1450 T4 尾根取付き
- 1700 T4 着

沢渡駐車場に車を置き、バスで上高地へ。登山計画書を提出していたらヘルメットをザックにつけた人々がやたら多い。そのパーティーに我々の行き先を尋ねられたので彼らも登攀だと決め込んで「屏風岩」と答えたら「岩登りですか？すごい」と言うではないか。岩登りでない多くの人が登攀用の立派なヘルメットを持っている現実にこちらがびっくり。縦走登山者もヘルメットをとの長野県警キャンペーンが行渡っているらしい。明神付近で中川がメガネを落とし慌てて引き返して回収。

旧横尾の岩小舎付近から渡渉。日照りのため水量は少なかった。渡渉した対岸、1 ルンゼ押し出末端 20m 上流に湧水がありここで水を補給。中川 6L 松田 5L。T4 尾根は荷が重くて苦勞した。途中、懸垂下降して来た横浜蝸牛（かたつむり）山岳会パーティー 6 名と会った。T4 で幕営。20 時、就寝前の松田がテントをかすめた少落石の音に気づいた。T4 幕営につきまとう危険だ。22 時頃、何と、今度は真上の雲稜ルートから 2 人組が懸垂下降して来た。落石はそのせいかも。2 人とも元気そうだったので

彼らと別れ我々は眠りについた。

■8/14 晴 屏風岩から廻沢へ

- 0430 起床
- 0500 T4 発
- 0600 東壁ルンゼ取付き 登攀開始
- 1000 2P で敗退を決定 懸垂下降
- 1140 雲稜ルート取付き
- 1900 終了まで 2P
- 2115 登攀終了 テント場着
- 2200 縦走に出発
- 0109(8/15) 屏風の頭
- 0529 廻沢



写真1. 雲稜ルート3P目A1のボルトラダーをリードする松田。

昨夜のきれいな星空には若干雲がある天気だが心配はなさそう。6時東壁ルンゼに中川リードで取付いた。荷が重く苦勞する。2P目松田に替わりザイルを延ばす。小ハングの下まで来たがなんとここまで2Pに4時間も要した。これでは完登はおぼつかない。10時に撤退を決めた。懸垂は50mザイル1回のみで取付きに到着。取付きには大阪労山 ぽっぽ会の橋本さんがリードの秋山さんを確保中。あいさつを交わし写真を撮って、雲稜ルートに転進した。登攀開始11:40。

雲稜ルート1P目は松田がリード。31年前中川はここIV+をフリーでリードしたと記録にあるが、道場不動岩の菱形ハングのようにハング奥のホールドがあるものこんな重荷ではホールドが甘く何とも難しい。中川はA1でやっと越した。あかん。2P目は、1982年には稜線を真直ぐ登ったというルート図を中川は描いた。今回の2P目は中川リードでV級スラブをA1で右にトラバース気味に右上し、ピナクルからやさしい岩溝を左に登って扇岩テラスへ。途中、上からコールなくロープが落ちてきて危うくバランスを崩しかけた。「誰じゃー！」と怒ったら「すみませーん」とお詫びのコールが聞こえ、しばらくして下降して来たのは何と東京ぶなの会のパーティーだという。OWCCから移った中島史博くんを知っているとのことで、扇岩テラスで話に花が咲いた。

3P目は松田リードで40mのA1ボルトラダー。ここの残置ボルトはすいぶん古くリングが無いものが多かった。荷が重い中川はタイオフの3mmスリング1本をついに飛ばしてしまった。ボルトは全面的に打ち直すかリングを設置する必要がある。4P目は中川リードで風化したぼろぼろの垂壁のA1に登る。以前登った時にはリングボルトの軸がくるくる回っていた。その直後に滝谷クラック尾根でお会いした吉尾弘さんと例の回るボルトについて話しながら登ったものだった。今回はボルトはしっかりしていたがすでに脱色しつつ古いたスリングにアブミをかけなければならず、相変わらずこの4P目が中川はきらいだ。もう少し登り中川は東壁ルンゼに合流して15mくらいザイルを伸ばして4P目を終了。すぐ右の東壁ルンゼルートからすごい気合の音がする。「くそー」「今度こそ完登するぞー」「うー」という声の主はぽっぽ会の秋山さん。声をかけ、17時の薄暗い中でフラッシュを炊いて写真を撮って差し上げた。後続の松田もすごい声に当初びっくりしたという。5P目は松田リードでスラブを35m。

6P目から8P目は泥だらけのルンゼ状。中川のヘッドランプが電力低下で暗く本当に苦勞したので

この3Pに2時間もかけてしまった。反省。21時過ぎにやっと雲稜ルート終了点のテント場に到着。苦しかったひとつめの登攀をやっと成し遂げたのだ。

テント場で、持参した最後の水を飲み22時いざ縦走へ。踏み跡は以前(2010年)に比してますます木が繁ってしまい、地面には木が無い幅40cmのトレースが明瞭だが、地上60cmから上は堅い頑丈な木々の世界。ハイマツが多くてその油が服にべっとりと移りこみ不快このうえない縦走であった。クロマメノキの実で喉の渇きを癒す。1時過ぎ、屏風の頭へ。晴れ上がった空には天の川がくっきりと走り、寝転がって休憩中に2人ともいくつもの流星を見た。幸せ。だが中川はこの頃には大分疲れていて方向オンチの症状が出ていた。横尾小屋の明かりと涸沢の小屋の明かりを間違え、松田に指摘されて初めて気づいた。これはいかん。屏風の耳のあたりまで来たとき松田が何か慌てている。アイスバイルをザックにしっかり固定していかなかったためバイルを紛失した、というのだ。屏風の頭まで戻ってみたが見つからなかった。マッターホルンのツムット稜を登ったバイルだ。松田は本当に残念そう。

やがて左からパノラマコースが合流してきた。すでに3時。ここで我々は奥又白の池には届かないことをすでに自覚していた。パチンコルートの第2の要素、前穂高北尾根IV峰はもう登れないのだ。我々は涸沢に行き先を定め、パノラマコースを急いだ。パノラマコースの状態は悪かった。通常は張り巡らされているはずのザイルは無く、残雪は急峻である。一般登山者が来たら事故は必至だねと言いながら5時に涸沢に着いてみてびっくり。パノラマコースは今年は閉鎖につき登山禁止ですと縄が張ってあったのだ。

すっかり夜が明けた涸沢は皆が起き出して活気があふれていた。我々は急いでテントを張り朝食を食べ、眠りについた。14日の4時起床から15日の5時29分まで25時間も行動し続けたのであった。

中川は貴重な教訓を得ていた。前回2010年8月に川嶋高志さんと屏風岩東稜を登った時は足がつり手がつり大変だった。今度はポカリスエットを切らさず飲み、屏風の頭からの縦走中はハイシーレモン1000をなめ続けた。これが見事に功を奏し、前回悩んだ痙攣を未然に防止し得たのである。へばってしまった中川を温かく見守ってくれた松田に大いに感謝である。

■8/16 晴 ドーム中央稜登攀

- 0240 起床
- 0400 涸沢発
- 0730 北峰南峰分岐点
- 0830 取付き着 順番待ち
- 0930 登攀開始
- 1320 登攀終了
- 1420 北峰南峰分岐点
- 1620 涸沢着



写真2. ドーム中央稜2P目をリードする松田。

今日も晴。北穂高南稜から滝谷に向かう。荷は軽いが北穂高南稜の登りは長く、結構こたえる。ドーム中央稜への下降路の入り口は北穂高岳南峰から涸沢岳に向かって進みドームを越えたところにある。

やや水平気味の踏み跡がついているので分かりやすい。下降路の入り口から 200m 位のところで第 3 尾根 T1 に着く。ここから 25m の懸垂。着地点からドームの方向に 100m 回り込むとドーム中央稜の取付きであった。取付きには 13 日に T4 尾根で会った横浜蝸牛山岳会の男女 2 人パーティーがいて、我々は順番を待つことになった。

9 時半登攀開始。中川リードで 1P 目はクラックが豊富な凹角を登る。中川はザックをスリングで腰に吊り下げて登ったが狭くて苦しかった。後続の松田は凹角の広い部分に足を広げて登り、これが成功した。2P 目は松田リードで V 級のフェース。中川はこのルートはこれで 4 回目だが、最初は 1974 年くらいだったから登山靴でこの細かいフェースを登ったことを思い出した。東海山岳会の伊藤正俊さんが「爪を立てて登るんじゃあ」と大声で教えてくれたものだ。3P 目は岩が積み重なったところをほぼ水平に 40m。4P 目は中川リードで凹角を登る。乾いた岩にフリクションが抜群に効く。しかも手あかが全くない。「登攀の唄を思い出す楽しい岩登りとはまさしくこれ」という快適そのものの登攀だった。最終 5P 目は松田リードで凹角を抜けてドームの頭へ。ここも快適だった。最後の 3 歩を登る中川を松田がカメラに収めてくれた。さらに、直前を登っていた横浜蝸牛山岳会の方が中川・松田の 2 人の写真を撮って下さるという。大いに感謝して 2 人はカメラに収まった(写真 3)。2 人の背景は滝谷である。登攀終了 13 時 20 分。

16 時 20 分涸沢に帰り、大いにリラックスしたことは言うまでもない。涸沢への下山中に携帯メールで緊急連絡先の瀬畠利章さんに登攀終了と 17 日下山予定の報告をした。南稜テント場付近で Docomo 電話だとアンテナが 4 本表示される電波強度で楽勝に通信が可能であった。これは緊急時などのため覚えておくべき情報である。



写真 3. ドーム中央稜を登りドームの頭に着いた松田と中川。眼下に滝谷の全容を望む。

■8/17 晴 下山

0700 涸沢発

1300 上高地着

下山である。へとへとだが何か気が楽だ。見慣れた道を歩き上高地へと向かう。

途中、横尾のあたりでセミの声を聞いた。セミっていたっけ？いや温暖化の影響で最近いるのだけと疑問に思った。帰ってから自然保護委員長の澤村秋則さんにお聞きしたら、ハルゼミやエゾハルゼミがいるとのことであった。よかった。

徳沢付近やパノラマコースを通る時の恒例行事が中川にはある。奥又白に至る松高ルンゼのずっと下部にナイロンザイル事件の当事者 岩稜会の若山五郎氏と実兄石岡繁雄氏にまつわるケルンがあり、毎回お墓参りに行くのだ。今回も出かけた。仏花にと野の花を集めながら登る道すがら会った 3 人が「岩稜会の方ですか？」と問う。「関係者です」と答えた。彼らもほかの方のお墓参りだという。「これから奥又の池まで登ります」という年配のパーティーもおられた。追悼キャンプだろうか。山の事故の影響の大きさを考えさせられつつ下山した。

上高地に着き、沢渡までバスで行って車に乗り換え、15時発で自宅着24時。

まとめ

- 今回、食事は全てレトルトとした。
ガス純重量225gのボンベを2人で2本、雨に備えてアライのエアライズ2テントを持参したのでツエルトはなし。中川の荷物は登攀装備6kg その他9kg。結果としては4泊5日の行程ではガスボンベは1本で十分だった。水はT4ピバークに備え、13日に2人で計11L担ぎ上げたが使用量実績は夜2人で2L、朝2人で1L、2日目の行動用に2人で4Lだったので4Lも捨ててしまった。もったいない。
- 登攀装備は、8.5mm50mロープ各自1本、クイックドロ各自6組、アイスバイル各自1、あぶみ各自2、ハーケン各自3枚ボルト各自3本、ロープマン各自2など。
- 寝袋の代わりに羽毛服上下+シュラフカバー。これで問題はとくに感じられなかった。中川のヘッドランプの性能の遅れを感じた。夜間登攀でルートを探す際、ワイドに効く照明が必要不可欠であった。
- 中川の登攀速度が32才当時の約50%に低下していた。今後の登山を考えていくうえで重要なデータである。松田さんには本当に感謝感謝。また一緒にどこか、登って下さるとありがたいと思います。

文献1 例えば横山勝丘「岳人」2013年6月号 p. 176.

文献2 「星稜」No.11, 星稜登高会, 1985, pp.53-56.

